



# ご挨拶

農学部長 加藤 征史郎

六篠会会員の皆様には、ますますお元気で活躍のことと拝察いたします。農学部と自然科学研究科の改組、神戸大学全体をおおむね変革の嵐の中で学部運営に尽力された岩崎前学部長は、本年3月末にご退官になりました。4月からは私が後任を仰せつかっております。浅学非才の身ではありますが、わが学部のさらなる発展を目標にして誠心誠意つとめたいと思っております。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

平成7年1月17日の兵庫県南部地震により全学では41名、農学部関係では生産環境情報学科2年(平成5年入学)細井里見さんと自然科学研究科博士前期課程農学系分科の研究生(留學生)曹瑞さんをなくしました。今もって忘れられないことのできない悲しい出来事でございます。また、一瞬にして学舎は甚大な被害をこうむり、各研究室は研究機器類、高価な試薬、苦勞して集めてあった貴重な試料などの多くを失いました。教官、学生のほとんどは、その後半年ないし1年間にわたり事実上研究を停止せざるをえませんでした。あの地震から5000日余りが経過し、研究、教育に必要な環境がようやく整ってまいりました。教官、事務官、学生、みんな今日まで本当によく頑張ってきたなあ、という感慨にもた気がいたしました。もちろん、会員の皆

様からの物心両面にわたるご支援は、私にとりまして大きな支えでした。皆様にあらためて感謝の意を表しますとともに、同じ地域にあつて被災された方々には心からお見舞ひ申し上げます。

平成5年度から教養部を廃止して4年一貫教育に切り替えたこと、また同時に学部改組を行い、学科編成やカリキュラムをかなり大幅に変更したことなどは、すでにご承知のことと存じます。今年4年目を迎え、この新しい体制にも教育研究上いろいろな無理や矛盾のあることがわかってきました。今年度は、それらを正すべく見直し作業を急がねばなりません。また、女子学生の急増への対応も重要課題です。この3年間の女子新入生の割合は42、49%でした。女子が半数を占めることになって少しも不思議ではありませんが、女子用施設等の整備が追いつかないのです。女子学生についてはもう一つ問題があります。女子の採用を嫌がる民間企業の多いことです。最近、元気のよい女子学生が多くなりました。卒業後は定職に着きたいという意欲も男子学生と変わりありません。それにもかかわらず企業が女子を拒否する事態が続けば、そして大學生の半数が女子になるとしたら、これまで頼りにしてきた学卒の半数しか雇用できなくなるのです。国家的大問題になるに違いありません。

つい最近のことですが、私は楽しい夢をみました。

ある朝大学に着くと、報道関係者が大勢待つていました。農学部の教官、しかも複数の教官がノーベル賞だか、日本学士院賞だかの候補に挙がっているというのです。ああ、これでわが学部は大丈夫だ。この人達が核となり、刺激剤となって学部の研究活動はますます活発になるだろう。教育研究環境ももっと改善されるだろうし、附置施設やセンター、研究所も設置されることになるだろう、とここまで考えたところで家内に起こされた。実は、その数日前のある懇談会で西塚学長が「大学、学部の発展には、突破口を切り開く人材の育成が第一」という意味の話をしていました。これが私の耳にこびり付いたのです。私は、この夢をただの夢で終わらせたくありません。われわれ教官がこれ以上以上に研鑽を積み重ねなければなりません、とりわけ若手教官、院生、学生に対して本学部で今可能なかぎりのよりよい研究環境と、内外の研究機関への留学といった個人の発展につながるあらゆる機会、そして自由のびのびと研究のできる雰囲気を提供することが肝要と考えています。

最後になりましたが、六篠会会員の皆様のご健勝とご発展をお祈りいたします。(平成8年6月)

## 会長挨拶

# 大震災から復興へ



六篠会会長 西川 欣一

戦後最悪の大被害  
あの恐ろしい大地震から二度目の夏が巡ってきた。平成七年一月十七日午前五時四十六分、史上初の震度「7」を記録した大地震。わずか二十秒の揺れが死者六千三百八十八人、負傷者三万八千五百二十九人、家屋全半壊十五万九千五百四十四棟、瓦礫の推量一千四百万トン。街を壊滅状態に陥れた悪夢の大惨事でした。阪神高速神戸線の高架が約六百米にわたって倒壊した映像や、生田神社の拝殿の屋根が地上に落ちていたり、二日間にわたって燃え続けた長田菅原地区の火災の様子が全国にテレビ放送されました。そして今なお四万三千五百六十二世帯が仮設住宅で暮らしている状態です。

徹夜で原稿書きをしていて、研究室の大きな書棚が倒れ、危ふく一命を落しそうになったり、六甲道の下宿が全壊し、瓦礫の中からはい出して研究室にかけつけたところ、避難者がぞくぞくと神戸大学に避難するなか実験棟がガスもれでくさくなり、集った数名の教官で実験棟を閉鎖し、自分達の避難のために阪急の線路を歩いて大阪方面に脱出した話なども聞きました。

復興と改革  
学舎の外壁、内装の補修と、壊れた実験装置の取り替えと並行して、学部改革が進んでいます。学部改革が「大学院の重点化」と「機構組織の改革」です。

すぐれた人材を社会に送り出す「大学院重点化」が背景にあります。学部の改組は農学部の伝統的な生物生産分野を中核としつつ新たに生命科学の分野や、自然環境や社会環境の分野にわたる「自然と人間が共に生きる」新たな学問領域への拡大発展をめざすものです。

# 大地震と農学部、そして今

農学部事務長 清原 健 貳

あれから早くも二回目の夏を迎えることになりました。今、農学部には、震災の傷痕を見ることはほとんどありません。教育研究活動は平常に復し、さらには、旧にも倍する活発な活動が行われております。

ここに到るまでの一年半、教官、事務官が、復旧復興を目標に、心を一つに努力した結果にはかなりません。

教官の多くが、貴重なデータ、冷凍保存の遺伝子酵素等資料を、水道水の噴出や停電で失いました。全国農学部の中でただ一校、本学部だけが教育研究を中止し、遅延することの無念さ、焦燥もありました。しかし、口には出

さず、堪えに堪えて復旧復興に全力を傾注された先生方に只ただ敬服するばかりです。

あのときは、例外なく皆被災者でありました。家が全壊した人、全焼した人。家は残っても内部は家具が散乱しました。ライフラインは絶たれ、家族の生存にも心配しなければなりません。交通機関も途絶しました。このようなき、農学部が駆けつけた先生方がいかに多かったか、農学部災害対策本部が設置される前に、都市ガスの噴出も応急処置で止めておりました。この処置が無かつたらば、爆発火災発生は必至の状況でした。大事が起きておれど、今日このような早い復

旧は無かつたと思われ。また、農学部は避難住民を受け入れました。多いときは百六十名、漸減を経て同年九月二十五日農学部避難所は解消いたしました。この間、被災者でもある教職員が、誠心誠意お世話しました。なかでも、先生方がボランティアで数名ずつ組まれて昼夜間の世話当直を続けられた時期もありました。本当に頭の下がる思いです。

大学全体では、農学部学生等二名を含む教職員二名、学生等三十九名が、阪神・淡路大震災により尊い命を奪われました。この方々の学問への情熱と輝かしい青春の限りのない想いを永久にとどめるための慰霊碑が、

本館前庭で行われ、小生、六篠会を代表して参列致しました。震災の模様を会報でもっと早くご報告すべきところ、同窓会幹事の方々には学部復興にこそがしく、やっとな般「復興」号として発行するはこびとなりました。

神戸大学学友会と神戸クラブについて  
神戸大学の同窓会とは、各学部の成立過程により、それぞれ独自の歴史と伝統を持ち、多くの卒業生の拠り所として積極的に活動してきています。

この学友会が検討の結果、神戸新聞会館の八階に専用クラブとして「神戸クラブ」(KUC)を昭和五十八年春に開設したわけです。この神戸クラブは、卒業生の幅広い交流の場として利用され、順調に推移してきましたが、阪神・淡路大震災で神戸新聞会館が被災・解体され、休止のやむなきに至りました。その後関係者の努力の結果、昨年九月から神戸ハーバランド内オウズオン・ザ・ハーバースカイで再開にこぎつたこと、ご存じの方も多かと思ひます。

神戸大学学友会は、母校と同窓会のパイプ役として相互の情報交換を図るとともに、同窓会としての母校支援の窓口として機能すべく活動し、神戸クラブ(KUC)は選出された運営委員会が中心となつて、会員の増強と会員の方々により親しく頂くための企画等の検討を行つていきます。

新しい神戸クラブ(KUC)は、神戸新聞会館当時のような専用クラブではありませんが、優先利用のできるフーズバーやカウンターもあり、落ち着いて談話できる場所があります。様々な会員特典も用意しています。

# 震災後の灘五郷

前川 季義

## 一・被害の概要

平成七年一月十七日午前五時四十六分に淡路島北部を震源地とするマグニチュード七・二の兵庫南部地震により、全国の清酒の約三〇%を出荷する清酒王国・灘五郷の酒造場は大きな被害を受けた。近代的鉄筋蔵は大丈夫であったが、木造蔵は殆ど倒壊し、第二次世界大戦の被災を免れた歴史

的遺産とも言えるレンガ造りの酒蔵、酒造記念館、酒造資料館なども崩壊し、有形、無形の損害は甚大であり、想像を絶する。精米工場、瓶詰工場、製品倉庫、資材倉庫など、また、内部設備、発酵タンク、貯蔵タンクなども損傷した。

灘五郷に加盟する五一企業の被害総額は、建物が約一〇〇億円、設備が六〇

〇億円、原材料及び製品の四〇〇億円とも言われる。しかし鉄筋コンクリート造りの醸造蔵、四季蔵などを併せ持つ大手企業は壊滅的な被害を免れた。

大被害を受けた酒造家は、清酒業界独特の不屈の企業精神、チームワーク、被災を免れた系列企業の協力により、製品出荷や醸造を開始し、清酒の確保と酒造業の再建に向かって邁進、努力し、震災二カ月後には灘五郷酒造場の七割近くが、何らかの形で醸造や瓶詰出荷を開始した。業界の立ち直りは予想外に速く、大手企業は設備の被害が比較的少ない鉄筋コンクリート蔵などを有し、醸造が開始され、瓶詰め出荷はほぼ正常に戻り、全体的な出荷数量

の不足は見られなくなった。本格的な酒蔵を再建し、七酒造年度に操業した酒造場は二企業である。一企業は伝統的な製造法を重んじた鉄筋蔵であり、一企業は酒造りの技、心、味を消費者に自由に見せ、楽しめさせる新しい酒蔵・吟醸工房である。なお協業化による本格的な鉄筋蔵の建築など復旧復興計画が進行し、新しい酒蔵の街が形成されようとしている。

しかし、問題は企業による格差が大きいことである。震災地に立地する中小メーカーのうち数社は、崩壊した木造蔵だけを所有し、復旧復興計画は定かでない。一企業は廃業を決定している。震災で木造の醸造蔵を失った中小メーカーは、新しい蔵の建設が緊急の課題であるが、復旧復興は進んでいな

い。杜氏らの高齢化を考えると、今後の醸造蔵は省力化した近代化工場が主流になるとも考えられ、年産千総級の酒蔵を再建するとすれば数億円以上の投資が必要とも言われ、資金面とともにも新たに投資して経営が成り立つかの悩みも多いようである。なおハイテク化で手造りの特徴まで失ってしまつてはとの懸念もある。清酒業界全体の設備は過剰気味であり、造れば売れる時代は過ぎたのである。

兵庫の酒、灘の酒が復興し、より発展するためには、大手企業、中小企業が共存し、消費者ニーズに沿った清酒の多様化、高級化を図ることが重要であり、そのためには金融を含む諸々の幅広い援助が必要であると考える。なおレンガ蔵、酒造記念館、酒造資料館など

の貴重な文化財も崩壊、損傷した。そのため、兵庫の酒、灘の酒の一層の発展を祈念し、産官学が協力し、文化財、灘の酒、兵庫の酒を一堂に集めた大規模な日本酒センター的なものを作るべきでないかと考える。

# 神戸市の復興について

KOBE六篠会  
神戸市公園緑化協会

松宮 道生

阪神・淡路大震災は、日本で始めての大都市における直下型地震であり、一瞬のうちに、5、500名にも及ぶ尊い生命を奪い、また、私たちの先人達が営々と築いてきた、美しいまち神戸のまちなみを無残な姿に変え、多くの市民の生活基盤を破壊しました。

その後、1年数か月の間、神戸市では災害復旧に努める一方、将来の神戸のまちのあり方を展望した復興計画の策定にも着手してきました。

神戸市の復興は、この震災からの単なる復旧でなく、海と山に恵まれた神戸の自然や、培われた文化を生かし、21世紀の国際都市にふさわしい、豊かで快適な新しい神戸の実現を目指すものです。

また、復興にあたっては、今回の震災の貴重な経験や教訓から謙虚に学び、新しいまちづくりのために生かしていくことが大切であると考え、「神戸市復興計画」では基本的視点として、次の3つを目標としています。

(1) 都市の機能性とゆとりの調和

大規模な自然災害の前で、現代の機能的な都市の脆弱な一面が露呈した。都市の機能だけを追求するのではなく、安全の視点から、都市機能の適正な配置や代替機能の確保など、機能性とゆとりの調和を図る。

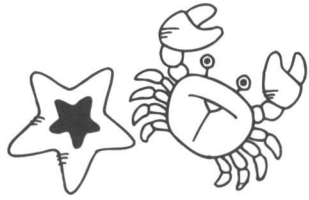
(2) 自然の恩恵・厳しさとの共生

神戸市は自然条件に恵まれた都市であるが、その反面、水害、震災など、幾多の災害を経験してきた。自然への畏敬の念を忘れず、同時に都市容量に配慮し、環境への負荷を配するだけでなく、持続的な発展が可能な都市づくりを行う。

(3) 人と人とのふれあいと交流

地震による甚大な被害にもかかわらず、市民は冷静さを失わず、人命救助や避難活動を行い、また国内外からの支援の和が大きな支えとなった。まちの主役は人という視点から、人々の相互交流を深め、市民主体のまちづくりを目標とする。

このような視点をベース



# 六甲台での五年間をふりかえって

金田 忠吉

平成八年三月末で定年退職し、十三年ぶりに埼玉県の鴻巣市民に戻りました。授業から解放されて、のんびりとした気分、退官記念に六篠会から頂いた花瓶に活けた白い大輪のカサブラソカを、よく似合うと眺めています。買ったときは蕾が多く余り期待はしなかったのに、十日余りたつて、小さかった最後の蕾までが開花し、よくぞがんばって咲いたと驚いています。なにが花をこんなに長持ちさせたのか、多分新しい花瓶のせい、科学的な根拠がなくとも、そう考えるのです。

神戸大学農学部での生活は僅か五年ではありましたが、さまざまな思い出深い貴重な年月でした。長らく農水省の研究機関にいたとはいっても、大学という新しい世界に移つての当座の生活は戸惑うことの多い毎日でした。最初の一か月は春日野道から登り切った高台で、朝夕を神戸港に出入りするフェリーを見下ろしての優雅な気分を味わい、転居の挨拶状を出し終えた頃には、もう浜甲子園合同宿舎に移っておりまして。

農水省での最後の十年は研究の現場から離れていましたので、新しい実験手法からは遠いところにいる身を実感すれば、必然的に授業に力を注ごうとします。しかし当時はシラバスも少なく、他の関連する講義で何が教えられているのかを知るには、学生に直接聞くしかなかったのですが、私の講義内容の大部分が、違う科目ですべてに講義されているのを知って、大学の授業のありかたを考えさせられ







# カリフォルニアの

## 青い空のもので

生物機能化学科生物機能分子化学講座食品・栄養化学

芦田 均

桜の咲き始めた日本を飛べ立ち、異常に暑かったカリフォルニアに降り立った1964年4月1日のカリフォルニア空は、さらさらと暑くすてに夏が始まっていた。噴き出した汗が流れず、次々に乾いて皮膚はパリパリ、喉はカラカラ。その時ふと見上げた空、あー、カリフォルニアの空はなんて青いんだ。空もよく、また周りに高い建物もほとんどないので、狭い日本しか知らない私には信じられないほどの大きな大きな濃い青い空が広がっていた。この大きな青い空のもとで、私は1年半、私の家族は2年過ごした。

私の留学先は、カリフォルニア大学デービス校。デービス校と言えば、農学関係では全米でも有数の大学の一つであり、本学部からも過去に多くの方々が訪問・留学されていたので、簡単に紹介させていたたく。デービスはサンフランシスコから北東へ約800マイル、カリフォルニア州の州都サクラメントの近郊に立地している人口5万人あまりの大学町である。州都サクラメントは米どころであり、一昨年の日本の米不足の際にカリフォルニア米を運河を経て日本に送っていた積み出し港として記憶されている方も多と思う。このサクラメントを中心とする周辺地域セントラルバレーは、別名トマトバレーとも呼ばれており、米よりもむしろトマトの産地である。それ以外にも、トウモロコシ、大豆、ワイン用のブドウ、アーモンドなどの生産地でもあり、一大農耕地帯をなしている。

さて、私のアメリカでのボスは日本人の松村文夫教授。我々日本人は、彼のこころを愛情を込めて松ちゃんと呼んでいる。松ちゃんの研究室は日本語禁止。松ちゃんが英語をしゃべるときは目に炎が見えて最初の4か月ぐらいいつも怒られているようで、恐くて仕方がなかった。この松ちゃん、仕事を放って日本語になると、人が変わった様になる。顔の好々爺に身変する。仕事にも遊びにも常にフルパワーで立ち向かう。このパワーは尋常ではなく、研究室のメンバーは誰もついていけない。

しばらくして研究室に慣れて周りに人々を見てみると、メンバーはみんな日本人ずれをしていて、梅干しとたくあんをこよなく愛する女性の研究員の母親は日本人、彼女の実験台にはカタカナ一覧表がある。読売ジャイアンツやガンバ大阪の帽子をかぶった学生たちが、竹内マリヤの曲をバックに研究にいそむ。日本人の訪問者の持ってきた土産のお菓子の大きな缶は一日でからっぽ。私がいったとき日本人の研究者が3人いたし、松ちゃんの下生は日本に多数いるらしいので、この状況は当たり前かもしれない。

松ちゃんに最初に与えられた課題は「日本の大学とアメリカの大学のどこが違うのか見えて帰らなさい。よく言われるように、高校生までは日本の学生の方がよくできるのに、大学生になつてからは逆転してしまふ。研究・教育システムで帰って下さい。」アメリカの良い点、悪い点、今後の研究・教育に役立つであろう個々の細かい情報は数多く得たが、全体像は漠然としたままである。私は、この課題に対する明確な回答はまだない。ただ、1年半で松ちゃんの研究に対する姿勢、松ちゃん流の研究室の運営方法はよく解り、非常にいい経験であった。

7月ぐらいいから軌道に乗った研究がようやく一段落ついたとき、デービスの長い夏も終わった。この年は秋がほとんどなく、いきなり雨季に突入した。毎日太陽マークをつけておけば予報的中率は抜群だった。アメリカの天気予報は全く当てにならない。12月から雨、雨、雨、そして年が明け洪水で道路も圃場も冠水した。「昨日、洪水のため停電して、暖炉に薪をくべて暖房と明かり取りをしたんだよ。」と日本へ電話した数日後、阪神大震災。サンディエゴの知人からの連絡で、あわてて日本へ電話をしたところ、幸いにしてその日の内に両方の両親の無事を確認できた。大学へは地震の6時間後に連絡が付き、電話に出て下さった隣の研究室の中田先生が、「もうなにもかも無茶苦茶やで、あなたの部屋も水びたしや。」と、教えて下さった。それから3日間、雨模様の下で、あそこが、あそこが、言葉にならない声を発しつつ真っ黒な神戸の空と壊れた街を

# ニューヨーク州の田舎にある大学

生物機能化学科 植物資源利用化学研究室 玉城 一

な雰囲気です。研究室の壁がなく、使いたい器具、機械があればどの研究室にでもかけて実験していたのが印象的でした。

ジニバは田舎町のせいかわ、人々はみんなフレンドリーで、溶け込むのにそう時間はかかりませんでした。パーティー、ソフトボール、コンサートその他もろもろな行事があると声をかけてもらいました。人々は神戸が日本のどこにあるかは当時あまり知りませんでした。私は神戸ステークキについて良く知っていました。高いステークキというもので非常に有名なのだそうです。

アメリカでの生活は研究でも私生活でも充実していました。滞米生活も残り50日というときに忘れもしないあの忘れられない大震災がやってきました。連日テレビで悲惨な神戸の光景が映し出されました。研究所の人々は、大学や神戸市民のことを大変心配してくれました。私は大変な時に留守にして申し訳ない気持ちでいっぱい、少くも、神戸の復興を手助けせねばという気持ちで、急遽滞在予定を切り上げて帰国することにしました。本当に急でしたが、たくさんの人々が義援金を携えて、お別れをいいに来てくれました。国を越えた親切な人々のことを私は一生忘れないうです。

こうして、わたしの一年半のアメリカ滞在は終わりを迎えました。最近、新築先生を中心に、農学部の海外学術交流を担当されている先生方のご尽力により、コーネル大学と農学部が姉妹校になり、より行きやすくなりました。一人で多くの人々がこれを機会にコーネル大学を訪ねられることを期待します。

最後に、この留学に際し、六條会から旅費の一部を援助していただきました。遅れ馳せながらここに厚く感謝申し上げます。

1993年8月9日夕方、私を乗せた飛行機は高度を下げて、ニューヨーク州のシラキュース空港に着陸しました。五大湖の一つオントリオ湖とその湖岸の広大な風景を眺めながら、これから始まる全く知らない土地での生活に思いを巡らせていました。期待と不安の入り混じった心境で、ちょっと緊張していました。空港に着くとストーランド教授自ら向かえにきてくれました。その温厚そうな風貌にこれまでの緊張がとれほっとしたのを覚えていま

ほっとしたのもつかの間、アメリカ流の手荒い歓迎が待っていました。飛行機に預けていた荷物がいつまでたっても出てこないのです。荷物受取のベルトコンベアの前で最後まで待ちました。その日は荷物を受け取ることができませんでした。結局、ストーランド教授のご尽力のおかげで荷物は2週間後に無事に手元に帰ってきました。1年6ヶ月のアメリカ生活はこうして始まりました。

コーネル大学はニューヨーク州のイサカという街にあり、アイビリーグに属するアメリカでは古い大学の1つです。私のいたNY S A E S (ニューヨーク州立農業実験ステーション)はコーネル大学の一部で、イサカから50マイルほど離れたジニバという街にありました。場所的にはオントリオ湖の南側でフィンガレイクと呼ばれる細長い湖(水河湖)がたくさんあり、風光明媚で観光地としても有名です。この地域はニューヨーク州の中でも有数の農業地帯で、主要な作物はりんご、ぶどう、トウモロコシ、レタスです。フィンガレイクのほとりには小さなワイナリーがしばしばあり、どこでも試飲させてくれます。

NY S A E S では地域の農業と密接に関係を保ちながら研究を行っています。研究所には学部の学生だけではなく、大学院の学生だけでしたので、静かで、かつ研究に関しては非常にアクティブでした。彼らはこの雰囲気「プロフェッショナルな雰囲気」と呼び、誇りにしていました。学問についていえば、学生は教官と対等の立場でディスカッションしていました。自由

# 「土壌学教授・高橋竹彦 先生をしのぶ」

名誉教授 東 順三

土壌学講座の教授に昇任したばかりの高橋様が、平成7年6月30日の未明に、54才の若さで直腸ガンのために亡くなった。悲嘆のきわみである。

高橋様が大学で卒業論文を作成するのに相談にのつたのをはじめ、卒業後、大学に残ることを勧めたのも私で、それ以降30年に近い間にわたって、土壌学講座で共に研究した間柄で、思い出は数多い。

高橋様は生来の自然愛好家で、とりわけ山が好きで、森を愛し、研究テーマも「山地の植生の遷移と土壌の生成過程との関連性」を究めることで、頑健な体質に物を言わせて、六甲山をくまなく踏破し、調査を押し進めていた。

また、サッカー、テニス、マラソンなどを愛好する万能のスポーツマンで、多くの仲間や学生から信望があった。

ところが、高橋様は10年ほど前に異常な血便を催し、診断の結果、悪性の病魔にとりつかれていることがわかり、直ちに腸の手術となった。医者は、本人には告げていなかったが、ガンとの転移については、何とも言えないというような説明で、病後のことが気掛かりだった。



# 阪神、淡路大震災を振り返って

## 六篠会幹事長 新家 龍

平成七年一月十七日の大震災によって物心両面で多大の被害をうけられた六篠会々員の皆様、又今なおその痛手からの脱却に日夜努力を重ねておられる皆様に、心からお見舞いを申し上げますと共に復旧の一日も早くからんことを心からお祈り致します。

神戸大学では、教職員二名、学生三十九名(留学生七名を含む)が不幸にも尊い命を奪われましたが、これらの犠牲者を偲んで慰霊碑が六甲台本館前庭に建立され、去る三月十五日にその除幕式が行われました。その碑文には、「友よ、神戸大学を、そして世界を見

つめてほしい、(中略) 私たちは、諸君一人ひとりの学問への情熱と輝かしい青春の限りない想いを永久に留めるために、この碑を建立する」と刻み込まれています。また、神戸大学では最近「兵庫県南部地震による震災の記録」を刊行しました。

それには大地震後の神戸大学における事実経過が詳細に集録されており、その中の農学部に関する内容を抜粋し、ここで報告しておきたいと思えます。まず、事実経過を追いますと、「平成七年一月十八日農学部

に災害対策本部が設置された。農学部の大会議室、中会議室及び大教室で被災避難住民が、又自然科学研究科には被災学生がそれぞれ避難生活を開始した。一月二十日に避難者名簿が作成され、キャンパス内に簡易トイレ十五基が設置された。農学部の電気設備は比較的早くから使用可能であったが、水道の復旧は二月二日であり、ガスの復旧は三月一日であった。

この間、六篠会は緊急学内幹事会を開き、平成六年度会計の予備費から被災学生への学資援助金として二十五万円を、又特別会計から農学部活動特別援助費として二十万円をそれぞれ支出することとし、直ちに実施しました。また、六篠会員をはじめ全国各地からの

お見舞いや義援金が届けられ、被災者の胸を強く打つものがありました。今回の大震災で「人の心の暖かさ」をこれ程までに感じたことはありませんでした。この機会を借りて、心から感謝の意を表したいと思います。また、大震災から一年が過ぎた平成八年一月二十日、農学部において大変印象的な行事がありました。それは農学部で避難していた人々が、再び農学部学生ホールに集まったことです。

互いに避難所生活中のことやその後の安否を涙と共に語り合う機会がもたれたのです。私自身もその場に出席して、「人の心の暖かさ」を再び感じて感激しました。その集まりの主旨は、「私達が今日あるのもお互いの励まし、悲しみを乗り越えてきたのも、支えられた方々の人のやさしさを知り、ともに今日一周年記念植樹を皆さんと迎えられる復興の記念とさせていただきます」(代表者 亀川博氏)とあるように、農学部に感謝の意をこめて記念植樹をすることとした。記念植樹は農学部玄関東側の前庭にされており、大震災の記念の一つとして永く残るものと思っております。被災者の誰もが忘れることのできない苦しみを共にした私達は、この貴重な体験を将来への「心の糧」として永く大切にしたいものです。六篠会報第十一号の発行に当り、今回の大震災後の主な経過を概略させていただきます。六篠会報第十一号の発行に当り、今回の大震災後の主な経過を概略させていただきます。

平成六年度庶務報告  
1995. 5. 16  
平成6年4月6日  
入学式(記念品配布)  
平成6年4月18日  
学内常任幹事会  
於 LANS BOX  
平成6年度定期役員会に  
ついての打ち合わせ  
その他  
平成6年4月28日  
平成5年度定期役員会  
於 金龍閣  
平成5年度経過報告  
平成5年度会計報告  
平成6年度役員選出  
平成6年度事業計画  
会則および代議員制度に  
ついて  
その他  
平成6年4月28日  
定年退職六篠会役員の祝  
賀会 於 金龍閣  
平成6年5月30日  
六篠会入会金納入の催促  
平成6年7月20日  
学内常任幹事会  
於 LANS BOX  
海外渡航援助の選考  
その他  
平成6年8月10日  
六篠会入会金納入の催促  
平成6年9月8日  
学内常任幹事会  
於 農学部小会議室  
農学部受電設備並びに配  
線工事に伴う特別援助に  
ついて  
その他  
平成6年9月12日  
学内幹事会  
於 農学部中会議室  
農学部受電設備並びに配  
線工事に伴う特別援助に  
ついて  
平成7年2月8日  
学内常任幹事会  
於 農学部小会議室  
震災関連の対応について  
平成7年3月9日  
合同慰霊祭  
平成7年3月28日  
学内常任幹事会  
於 LANS BOX  
平成7年度役員総会につ

いいて  
震災関連の援助について  
その他  
平成7年5月8日  
学内常任幹事会  
於 小会議室  
平成7年度定期役員会に  
ついての打ち合わせ  
その他  
平成7年5月12日  
芦田均先生  
平成6年10月28日  
竹田真木先生  
平成6年11月7日  
白井康仁先生  
(自然科学研究科教員)  
学術講演会援助  
生物機能化学科 5件  
生物環境制御学科 5件  
植物資源学科 5件  
生産環境情報学科 0件  
応用動物学科 0件  
その他 0件  
慶弔関連  
平成6年4月19日  
弔電 故伊澤伍郎先生の  
御遺族様  
平成6年8月27日  
弔電 加藤肇先生の御尊  
父  
平成6年9月22日  
弔電 小林央住氏(山口  
大学農学部教授・兵Z15)  
弔電 中島英夫氏  
(兵Z15)  
平成6年12月11日  
弔電・花輪 岩田久二雄  
先生  
平成6年12月20日  
弔電・花輪 水野進先生  
平成6年3月20日  
弔電 猪俣涼一氏  
(兵P112)  
平成7年度庶務報告  
1996. 4. 26  
平成7年4月6日  
入学式(記念品配布)  
平成7年4月12日  
学内常任幹事会  
於 小会議室  
平成7年度定期役員会に

石井尊生先生  
8/20/8/30(フランス)  
金地通生先生  
学術講演会援助  
生物機能化学科 2件  
生物環境制御学科 7件  
植物資源学科 0件  
生産環境情報学科 0件  
応用動物学科 2件  
その他 11件  
慶弔関連  
平成7年4月26日  
祝電 西羅寛先生(叙勲)  
平成7年5月1日  
弔電 伊藤和彦先生  
平成7年6月30日  
弔電・献花  
高橋竹彦先生  
平成7年9月1日  
弔電 高橋竹彦先生  
(学葬)



平成七年四月三日に大教室の避難所が解消した。続いて大会議室の避難所は六月二十六日に解消し、農学部の最後の避難所となった中会議室が解消したのは九月二十五日であった。一月十七日に始まって以来、二六〇日余の避難所生活が続いたことになった。

一方、農学部の教育・研究面については、水道及びガスの供給がストップしたため、平成七年一月二十九日まで全面的に休講となった。一月三十日から授業は再開されたが、大災害の中で登校するのは極めて困難であった。二月二日以降の平成六年度授業について、学部学生は専門科目の残りの講義及び後期の期末試験はテーマをもって代えた。卒業研究指導は指導教官の指示により行い、大学院学生の試験は平常点をもって代えた。二月二日に学部・大



学院学生を登校させ、授業計画が説明された。  
平成七年度前期授業は授業開始一週間前に大教室が使用できるようになって正常化した。しかし、前述のように、中会議室の避難所が解消するまでは、集中講義や大学院セミナー等は他の教室を振替使用した。」  
この様に、農学部をはじめ神戸大学の多くの学部が被災者の避難所として、平成七年十一月三十日まで全ての避難所が解消するまで、地域住民と大災害の苦しみとを分かち合い、今まで予想もしなかった種々な体験をすることができたと思えます。

平成6年度定期役員会に  
ついて  
平成6年4月28日  
定年退職六篠会役員の祝  
賀会 於 金龍閣  
平成6年5月30日  
六篠会入会金納入の催促  
平成6年7月20日  
学内常任幹事会  
於 LANS BOX  
海外渡航援助の選考  
その他  
平成6年8月10日  
六篠会入会金納入の催促  
平成6年9月8日  
学内常任幹事会  
於 農学部小会議室  
農学部受電設備並びに配  
線工事に伴う特別援助に  
ついて  
その他  
平成6年9月12日  
学内幹事会  
於 農学部中会議室  
農学部受電設備並びに配  
線工事に伴う特別援助に  
ついて  
平成7年2月8日  
学内常任幹事会  
於 農学部小会議室  
震災関連の対応について  
平成7年3月9日  
合同慰霊祭  
平成7年3月28日  
学内常任幹事会  
於 LANS BOX  
平成7年度役員総会につ

いいて  
震災関連の援助について  
その他  
平成7年5月8日  
学内常任幹事会  
於 小会議室  
平成7年度定期役員会に  
ついての打ち合わせ  
その他  
平成7年5月12日  
芦田均先生  
平成6年10月28日  
竹田真木先生  
平成6年11月7日  
白井康仁先生  
(自然科学研究科教員)  
学術講演会援助  
生物機能化学科 5件  
生物環境制御学科 5件  
植物資源学科 5件  
生産環境情報学科 0件  
応用動物学科 0件  
その他 0件  
慶弔関連  
平成6年4月19日  
弔電 故伊澤伍郎先生の  
御遺族様  
平成6年8月27日  
弔電 加藤肇先生の御尊  
父  
平成6年9月22日  
弔電 小林央住氏(山口  
大学農学部教授・兵Z15)  
弔電 中島英夫氏  
(兵Z15)  
平成6年12月11日  
弔電・花輪 岩田久二雄  
先生  
平成6年12月20日  
弔電・花輪 水野進先生  
平成6年3月20日  
弔電 猪俣涼一氏  
(兵P112)  
平成7年度庶務報告  
1996. 4. 26  
平成7年4月6日  
入学式(記念品配布)  
平成7年4月12日  
学内常任幹事会  
於 小会議室  
平成7年度定期役員会に

石井尊生先生  
8/20/8/30(フランス)  
金地通生先生  
学術講演会援助  
生物機能化学科 2件  
生物環境制御学科 7件  
植物資源学科 0件  
生産環境情報学科 0件  
応用動物学科 2件  
その他 11件  
慶弔関連  
平成7年4月26日  
祝電 西羅寛先生(叙勲)  
平成7年5月1日  
弔電 伊藤和彦先生  
平成7年6月30日  
弔電・献花  
高橋竹彦先生  
平成7年9月1日  
弔電 高橋竹彦先生  
(学葬)



六篠会平成 6 年度一般会計決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	2,940,566	本年度支出金	8,279,178
本年度入金	5,899,411	次年度繰越金	560,799
合計	8,839,977	合計	8,839,977

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	2,940,566	2,940,566
一般会金	4,800,000	4,950,000
名簿売上金	900,000	902,580
預金利子	60,000	44,761
雑収入	3,000	2,070
合計	8,703,566	8,839,977

支出の部

項目	予算額	決算額
農学部・農場活動援助費	550,000	550,000
一般事業費	1,650,000	1,432,769
一般事務費	1,000,000	938,228
会議費	200,000	176,107
旅費	30,000	17,010
慶弔費	200,000	251,936
神大学友会経費	100,000	12,000
学術振興基金への繰り入れ	4,250,000	4,250,000
予備費	723,566	651,128
合計	8,703,566	8,279,178

六篠会平成 7 年度一般会計決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	560,799	本年度支出金	3,964,658
本年度入金	5,339,924	次年度繰越金	1,936,065
合計	5,900,723	合計	5,900,723

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	560,799	560,799
一般会金	5,100,000	5,280,000
預金利子	60,000	30,494
雑収入	3,000	29,430
合計	5,723,799	5,900,723

支出の部

項目	予算額	決算額
農学部・農場活動援助費	550,000	550,000
一般事業費	1,900,000	575,326
一般事務費	1,200,000	1,083,058
会議費	200,000	163,880
旅費	100,000	46,540
慶弔費	300,000	482,854
神大学友会経費	100,000	63,000
学術振興基金への繰り入れ	800,000	800,000
予備費	573,799	200,000
合計	5,723,799	3,964,658

六篠会平成 8 年度学術振興基金予算 (案)

収入の部

前年度繰越金	35,967,859	
一般会計より繰り入れ	800,000	
預金利子	500,000	
合計	37,267,859	

支出の部

学術交流援助費	450,000	15,000×3
学術活動援助費	500,000	20,000×15、シンポジウム援助
予備費	500,000	
保留金	35,817,859	
合計	37,267,859	

六篠会平成 6 年度学術振興基金決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	32,105,700	本年度支出金	2,020,000
本年度入金	5,411,106	次年度繰越金	35,496,806
合計	37,516,806	合計	37,516,806

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	32,105,700	32,105,700
一般会計からの繰り入れ	4,250,000	4,250,000
預金利子	900,000	1,161,106
合計	37,255,700	37,516,806

支出の部

項目	予算額	決算額
学術交流援助費	750,000	600,000
学術活動援助費	750,000	420,000
予備費	500,000	1,000,000
保留金	35,255,700	0
合計	37,255,700	2,020,000

六篠会平成 7 年度学術振興基金決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	35,496,806	本年度支出金	770,000
本年度入金	1,241,053	次年度繰越金	35,967,859
合計	36,737,859	合計	36,737,859

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	35,496,806	35,496,806
一般会計からの繰り入れ	800,000	800,000
預金利子	1,200,000	441,053
合計	37,496,806	36,737,859

支出の部

項目	予算額	決算額
学術交流援助費	750,000	300,000
学術活動援助費	500,000	220,000
学資援助費	250,000	250,000
予備費	500,000	0
保留金	35,496,806	0
合計	37,496,806	770,000

六篠会平成 8 年度一般会計予算 (案)

収入の部

前年度繰越金	1,936,065	
一般会金	5,100,000	
預金利子	30,000	30,000×170
雑収入	3,000	
合計	7,069,065	

支出の部

農学部・農場活動援助費	1,250,000	農学部長会議援助700,000を含む
一般事業費	1,650,000	名簿入力費 50,000
一般事務費	1,200,000	会報発行費 1,000,000
会議費	200,000	各種活動援助費 100,000
旅費	50,000	図書館援助費 200,000
慶弔費	300,000	卒業祝賀会援助費 300,000
神大学友会経費	100,000	
学術振興基金への繰り入れ	800,000	
代議員制度総会費用	500,000	
予備費	1,019,065	環境整備費を組み込む
合計	7,069,065	





